

## 助産師実習における分娩介助件数に関する調査

## The Research of the Counting Delivery Setting Experiences on Midwifery Practical Training

蓼沼 由紀子, 鈴木 由美

## 要 約

最近では、分娩件数の減少などの理由により、助産師学生は「10例程度」の分娩を経験することが困難な状況になっている。学生時代に規定の10例の分娩介助を行わなかった場合、その後何らかのわだかまりになったり、臨床に出て影響するのではないかと疑問をもった。当学専攻科は5年目であり、過去4年間の卒業生に対して分娩介助例数に関する調査を行った。半数以上は10例以上の分娩介助を経験していた。そして学生時代の分娩介助経験は「わだかまりにはならない」と回答したものが半数以上であったが、「臨床に影響がある」と回答したものが半数以上いた。このことは、卒後教育だけに期待してはならない事を示唆している。

キーワード：分娩例数，分娩介助，卒後教育

## 緒 言

助産師養成指定規則は、すべての学生が「10例程度」の分娩介助を行うことを求めている。しかし、これまでに2～3例の分娩介助で卒業させている教育機関もあることから、2004年に厚生労働省は「10例程度」の解釈について、9例以上という通達をした。

実際は、少子化による分娩件数の減少、正常に経過していた分娩でも結果的に帝王切開になる症例や産婦あるいはその家族から同意が得られないなど、限られた期間内で学生が規定の「10例程度」の分娩介助をすることは難しい状況にある。本校においてもすべての学生が10例の分娩介助を行って卒業をしているわけではない。

2～3例の分娩介助と10例の分娩介助では、学生が得る分娩介助技術、分娩を診断する能力において明らかに異なることが予想できるが、8～9例の分娩介助と10例の分娩介助では、何らかの差が生じるものなのであろうか。先行研究をみると、久米らは助産師学生が分娩介助を自ら判断してできるようになるためには最低9例以上の分娩介助を是非とも行わなければならないと述べている<sup>1)</sup>。土岐らの研究では、分娩介助技術を得点化して技術の到達度を検討しており、そのなかで8、9例目では技術の得点にばらつきが大きく、10例目でようやく全体の技術の到達度が

揃ってきていると述べている<sup>2)</sup>。つまりある程度の分娩介助技術と分娩を診断する能力を得るためには、やはり10例の分娩介助が必要だと思われる。

また、分娩介助例数が10例に達しないことにより卒業までに必要な技術や能力が到達できないだけでなく、学生がそのことにわだかまりをもつことはないのだろうか。技術や診断能力は卒業後に分娩介助をしていくなかで習得できるが、学生がわだかまりをもって実習を終えたならば、卒業後何らかの支障をきたすことがあるのではないだろうか。

そこで今回、学生時代の分娩介助例数に対する充足度、わだかまりについて明らかにし、今後の分娩介助実習をどのようにしていけばよいのかを検討していく。

## ＜用語の定義＞

分娩介助：分娩第1・2期の外陰部洗浄時から分娩第4期までの助産をいう。

充足度：十分な条件が満たされること。ここでは定められた学生としての分娩介助を行い、達成感を得ること。

わだかまり：しこりになる、トラウマ、コンプレックスを抱くなどの心理状態。

## 研究方法

対象：桐生短期大学 専攻科助産学専攻1期生～4期

生39名（回収率65%）。

調査期間：平成17年7月30日～8月28日

方法：自記式質問紙を郵送にて配布，回収した。

質問の内容：臨床経験年数，施設の種類，所属部署の業務内容，学生時代の分娩介助例数，学生時代の分娩介助例数についての考え方など。

分析方法：エクセルによる単純集計，クロス集計。

倫理的配慮：研究動機，研究の意義，目的，研究方法，研究に参加する利益・不利益，プライバシーと尊厳の権利，研究参加を拒否する権利についての説明を文書をもって行った。

## 結果

### 1) 対象者の属性

臨床経験については1年目（新卒）14人（35.9%），2年目10人（25.6%），3年目7人（17.9%），4年目6人（15.4%）からの回答が得られた。2人は卒業後の年数が不明だった。

卒業生の就職先の施設については，大学病院 4人（10.3%），国公立の総合病院8人（20.5%），民間の総合病院16人（41.0%），個人病院2人（5.1%），個人医院2人（5.1%）その他（助産院，無職など）5人であった。

所属部署については，産科単科は4人（10.3%）産婦人科21人（53.8%），産婦人科と他科の混合が10人（25.6%）その他が3人（7.7%），不明2人だった。

表1 現在行っている業務内容 複数回答 n=39

カテゴリー	人	%
乳房ケア	36	92.3
分娩介助	35	89.7
入院妊婦のケア	35	89.7
産褥期のケア	35	89.7
新生児のケア	28	71.8
産褥期保健指導	27	69.2
母教育学級	21	53.8
婦人科ケア	18	46.2
母乳相談	16	41.0
外来妊婦保健指導	10	25.6
他科の患者のケア	7	17.9
助産師外来	5	12.8
小児科看護	4	10.3
乳児相談	4	10.3
不妊患者のケア	4	10.3
思春期・更年期保健指導	3	5.1
その他	5	12.8

現在行っている業務内容は，分娩介助および乳房ケア，褥婦・妊婦の保健指導とケア，新生児のケア，婦人科患者のケア，助産師外来などであった（表1）。

### 2) 学生時代の分娩介助例数とそれに対する充足度について

学生時代の分娩介助例数は，11例以上2人（5.1%），10例20人（51.3%），9例10人（25.6%），8例4人（10.3%），無回答3人であった。7例以下はいなかった。

学生時代の分娩介助例数についての考え方は，「十分である」と答えたものは10人（27.8%），「十分とはいえない」と答えたものは22人（61.1%），「足りない」と答えたものは3人（8.3%），その他1人（2.8%）であった（表2）。

表2 学生時代の分娩介助例数に対する充足度 n=36

分娩介助例数	10例	9例	8例	11例以上	計
十分である	7	2	1	0	10
十分とはいえない	11	6	3	2	22
足りない	1	2	0	0	3
その他	1	0	0	0	1

(人)

### 3) 学生時代の分娩介助例数が規定数に満たないとき、「わだかまり」になるか

学生時代の分娩介助例数が規定数に満たないとき，「わだかまり」になるかどうかについては，「わだかまりになる」と答えたものは9人（25.0%），「わだかまりにならない」と答えたものは25人（69.4%），その他2人（27.8%）であった（図1）。

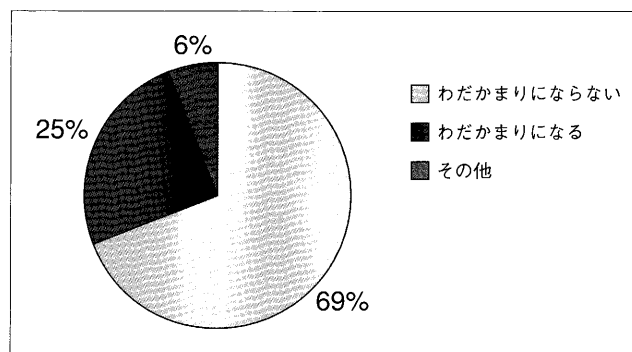


図1 分娩介助例数が規定数に満たないとわだかまりになるか n=36

わだかまりの内容については，「分娩に自信がもてない」13人（48.1%），「分娩を多く介助する人にコンプレックスを抱く」5人（18.5%），「分娩に対するコンプレックスを抱く」4人（14.8%），「分娩がいやになる」1人（3.7%），その他4人（14.8%）であった（表3）。その他の意見として就職した他の同期が10例介助していた場合に少しスタートが自分だけ遅いと思ってしまう，わだかまりよりは不安に思うであった。

表3 わだかまりの内容 n=27

カテゴリー	人	%
分娩に自信がもてない	13	48.1
分娩を多く介助する人にコンプレックスを抱く	5	18.5
分娩介助にコンプレックスを抱く	4	14.8
分娩がいやになる	1	3.7
その他	4	14.8

#### 4) 学生時代の分娩介助例数の臨床に出てからの業務への影響

学生時代の分娩介助例数は臨床に出てからの業務に影響を与えるのかどうかについては、「臨床に出てから影響する」と答えたものは20人(52.6%)、「臨床に出ると関係がない」と答えたものは17人(44.7%)、その他1人(2.7%)であった(図2)。

「臨床に出てから影響する」と答えたものの理由は、学生時代の分娩介助例数が少ないと介助技術や分娩診断能力が身についていないなどであった。「臨床に出ると関係がない」と答えたものの理由は卒後教育で補充できる、臨床に出ればできるようになるなどであった。

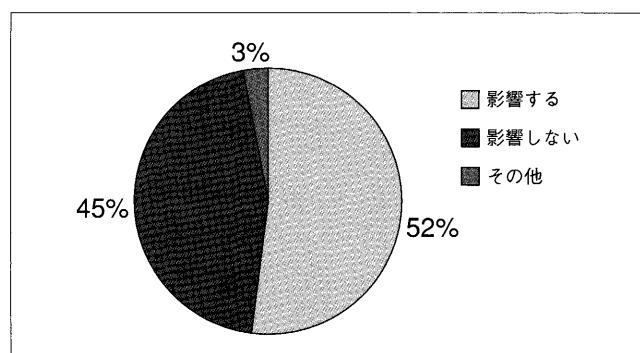


図2 学生時代の分娩介助例数は臨床に出てから業務に影響を与えるか n=38

## 考 察

学生時代の分娩介助例数に対する充足度は、分娩介助例数に関係なく十分とはいえないと考えている学生が51.3%と最も多かった。分娩の進行度の診断や会陰保護の習得技術は10例目でも困難であると報告されている<sup>3)</sup>ように、学生が規定数の10例の分娩介助を行ったとしても十分ではないと考えるのも当然である。産婦の全体像を把握したうえで、分娩進行に影響を与える情報を分析、統合して分娩の進行を予測したり、より高度の分娩介助技術の習得には、より多くの症例をみる必要がある。卒業後に分娩介助例数を重ねることにより、助産師として独立して診断ができ、ケアを自分の責任で行える実践

能力をもてるようになる。しかし学生時代に学ばなければならなかったことを卒業後に行えばよいのではなく、基礎をつくるには、10例程度の介助が必要になるであろう。

また、学生時代の分娩介助例数は、臨床に出てからの業務に影響すると答えたものは52.6%いた。臨床に出ると卒業後1年目であっても、分娩介助を任せられ、責任をもって産婦を受け持たなければならない。学生時代に学んだことをもとに分娩進行を把握し、分娩介助を行うことになる。そのため学生時代に10例の分娩介助を行うことが是非とも必要だと考えるが、少子化や産婦から承諾が得られないなど昨今の社会的背景を考えると学生全員を分娩介助10例行わせて卒業させるのは難しい。実習の最終段階(8・9・10例目)で目標が達成できるような効果的な指導が望まれる。岩木によると学生にとって学びの少ない事例は、学生にとって思考する時間の余裕がなかった事例と、指導者からのフィードバックが得られなかった状況である<sup>4)</sup>。このことより時間的制約から分娩介助ができなくとも分娩第1期を受け持ち、分娩進行の判断を学べる症例を学生に経験させたり、分娩介助後、早期に指導者とのフィードバックの時間をつくれるように調整し、1つの症例から多くのことを学べる環境をつくっていく必要がある。

学生時代の分娩介助例数が期定数に満たないとき、「わだかまり」になるかどうかについては、多くの学生がわだかまりにならないと答えていたが、わだかまりになると答えていたものが25%いた。分娩介助例数が規定数に満たないことに対するわだかまりとは、つまり卒業までに到達しなければならないところまで到達してないことに対するわだかまりと考えることができる。学生にとって始めの1~3例目の分娩介助は緊張でわけのわからないうちにすぎてしまう。そして分娩介助例数を重ねていくうちに、冷静に判断できるようになる。岩木は、学生の学びは分娩進行に目が向かない段階から分娩が進行していることを察知できる段階、分娩進行の段階的な変化が理解できる段階、産婦を全体的に把握して、おおまかな分娩進行状況が理解できる段階、産婦を全体的に把握したうえで特定の徴候から確実な分娩進行状況を理解できる段階へと積み重なっていたと述べている<sup>4)</sup>。分娩介助の最終段階は、岩木のいう産婦を全体的に把握したうえで特定の徴候から確実な分娩進行状況を理解できる段階であるため、学生は分娩介助1例で多くのことを学ぶ。学生はそのことを知っ

ているため、分娩介助が8, 9例で終わってしまうとわだかまりをもってしまうのだろう。

学生時代に学ぶべきことは、学生時代に学ぶべきであるが、到達できなかった場合は卒後教育に委ねることになる。しかし、平成16年度厚生労働省医療関係者確保対策等補助金看護職員確保対策特別事業の報告によると、助産師の継続教育に関する状況では、「理念がある」という回答が5%未満であり、継続教育に関する委員会などは6割以上が設けているものの、まだ不足している状況がみられる<sup>9)</sup>。学生時代の分娩介助例数が10例に達するように努力すべきであるが、それとともに卒後教育の充実を期待せざるを得ない状況である。

## 結 論

1. 規定数である10例の分娩介助が達成できても、十分ではないと考えているものは、61.1%であった。
2. 学生時代の分娩介助例数は臨床に出てからの業務に影響すると考えているものは、52.6%であった。
3. 学生時代の分娩介助例数が規定の10例に達しなくてもわだかまりにはならないと考えているものは、69.4%であった。

## 研究の限界

今回の調査は、経験年数の低い対象者ほど回収率が高く、よって結果には偏りがあると考えられる。また

卒業時の分娩件数に対しての考え方を振り返って回答しているため、データの正確性に欠ける。そのため今回の結果を一般化するには限界がある。

最後に今回の調査に協力してくださいました桐生短期大学専攻科助産学専攻の卒業生の皆様に深く感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 久米美代子, 常盤洋子, 松村桂子: 助産婦学校における5年間の分娩介助実習の実施結果 (①) チェックリストを使用した分娩介助実習展開の結果. 看護教育, 30 (13): 829, 1969.
- 2) 土岐初恵, 片山春代, 衣川さえ子他: 助産婦学生の分娩介助技術の到達度. Quality Nursing, 3 (10): 63-69, 1997.
- 3) 堀内寛子, 柳吉桂子: 分娩介助実習に関する一考察. 京都大学医療技術短期大学紀要, 19: 39-48, 1999.
- 4) 岩木宏子: 助産婦学生の分娩介助実習における学びの積み重ねについて. 日本助産学会誌, 10 (1): 36-45, 1996.
- 5) 社団法人 日本助産師会: 「新人助産師研修の充実に向けた研修体制の検討に関する報告書」平成16年度厚生労働省医療関係者確保対策等補助金看護職員確保対策特別事業, 2005.

## The Research of the Counting Delivery Setting Experiences on Midwifery Practical Training

Yukiko Tadenuma, Yumi Suzuki

### Abstract

Recently so the deliveries are getting less that it is difficult for midwifery students to experience "about 10" delivery settings. We supposed that if they do not experience the regulation 10 delivery settings, they will have "bad feelings against the delivery", or the experiences will have a influence on the bedside work as a midwife.

The post graduated midwifery course in Kiryu Junior College stand on 5th year, we investigated the number of delivery settings to the past 4 years graduated students. Half of them experienced more than 10 delivery settings. In addition, more than half responded that the past experience in school days have no influence such as "bad feelings against the delivery", beside half of them responded "The past experience have influence to the bedside work as midwife". It suggested that we should not only expected the post graduated education.

Keywords: Delivery, Delivery settings, Post graduated education